

205 日本の影響を受けた画家マチュラン・メウー（2023 年 10 月 24 日）

マチュラン・メウー（1882-1958）は、ブルターニュ地方のランバル（現在はランバル＝アルモール）に生まれ、ブルターニュの景色や人々の素朴な生活を描いた画家です。今回は、メウーが日本を描いた作品を見ていきます。

メウーは、銀行家のアルベール・カーンから奨学金を得て、1914 年にマルゲリット夫人を伴って日本に滞在しました。この奨学金は、カーンが 1898 年に設立した世界一周奨学金です。カーンは、フランスが進むべき道を知るため、また世界平和のためには、世界の人々の暮らしや考えを知ることが必要と考えていました。奨学金は、将来を担う若手教員を対象としたものでしたが、メウーはこの奨学金を得た唯一の画家でした。



メウーは、1914 年 1 月にル・アーブル港を出発し、ハワイに滞在した後、4 月に日本に到着し、大阪、京都、奈良などを旅しました。メウーは、日本で目にした人々の生活や文化を、デッサンや水彩画に描きました。写真左は、大阪の芝居小屋を描いた水彩画です。芝居小屋は、今ではその数が減りましたが、当時は庶民が集まる娯楽の場でした。芝居小屋の前には、しばしば幟（のぼり）が立っています。幟は、旗の一種で、上辺と片方の長辺を竿にくくりつけているのが特徴です。絵の中に何枚もの青地の幟を描かれています。幟の中の白い部分は、何らかの漢字を表したものと思われますが、残念ながら、書かれていた文字を推測することが困難です。

もう一枚は、京都にある伏見稲荷大社の千本鳥居です（写真右）。以前に[鳥居](#)についてご紹介しました。赤い鳥居が連なる光景は、撮影スポットとして有名です。現代の観光客が、有名な千本鳥居の写真を撮りたくなるのと同じように、メウーはこの珍しい光景を描いたことでしょう。ちなみにここで言う「千本」とは、「数えきれない多い」という意味です。実際に 1000 基の鳥居があるわけではありませんが、それでも 800 から 850 基の鳥居があると言われています（2 枚の絵は、2022 年 4 月にアルベール・カーン美術館がリニューアルオープンした際の展覧会「世界一周 - 映像の航海、アルベール・カーン」展で展示）。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

メウーは、一年半の日本滞在を予定していましたが、第一次世界大戦が勃発したことで、1914 年の 8 月に帰国を余儀なくされました。その後、メウーが日本を訪れることはありませんでした。半年に満たない短い期間でしたが、日本滞在は、画家メウーに大きな影響を与えました。1982 年に放映されたドキュメンタリー（[国立視聴覚研究所のアーカイブ](#)で閲覧可能。仏語のみ。）の中で、画家の娘であるマリヴォンヌ・メウーさんは、日本旅行の中では、日本のスタイル、シンプルさ、繊細な色使いや洗練された生活がメウーの記憶に残り、彼は、日本人の習慣、服装や祭礼に感心し、とても印象的だったと本人が語っていたと証言しています。

兵役を終えた後、メウーは 1920 年頃からブルターニュ地方のカンペールにあるエンリオ社のファイアンス焼のデザインを描くようになりました。メウーがデザインしたファイアンス焼の作品は、カンペールにあるファイアンス美術館や県立ブルターニュ博物館で見ることができます。ブルターニュの人々の生活を題材にした図柄の作品（写真右）の



ほか、メウーの代表作となったのが「ラ・メール（海）」と題した食器シリーズ（写真下の 2 枚）です。大胆な色使いと、今にも皿から飛び出してくそうな生き生きとした魚や貝を見ていて、葛飾北斎による[北斎漫画](#)を参考にしてデザインされた[セルビス・ルソー](#)を思い出しました。メウーが、セルビス・ルソーを意識してセルビス・ラ・メールのデザインを描いたかどうかは分かりません。しかし、メウーの心の奥底に残る日本での記憶は、日本の影響を受けた作品への関心を引き寄せ、このようなデザインを生んだのではないかと推測するのは私だけでしょうか。

